

京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科

学生員 ○前田 敬
学生員 福井 賢一郎
正会員 北村 隆一

1. はじめに

豊かな生活を送るためには、豊かな公共領域が必要である。この言葉の背後には、人間は社会的動物であり、孤立したまま自我を充足させることは不可能であるという考えがある。都心部と郊外とを比較した場合、郊外は公共領域に乏しく、そのため魅力のない地域になっている可能性がある。本研究の目的は、この「郊外が都心部と比べて魅力的でない地域である」という問いを検討することにある。ここで得られた知見は、今後都市整備を行っていく上で有益なものとなるであろう。

2. 理論的背景

(1) Oldenburg の「第3の場所」

社会学者 Oldenburg¹⁾ は公共領域の 1 つの概念として、人々の生活に不可欠なものとしての“第3の場所”の概念を提案している。“第3”とは自宅、職場に次ぐ場所を指し、人々が日常的に交流しあえる場所である。具体的には、パブやカフェなどがあげられる。また、そのような場所は商業的に高い収入を生むことのない、昔からある場所であり、収益性を重視したチェーン店ではないとされる。

(2) 公共領域と娯楽活動

人々が持つ社会的ネットワーク構成員間の交流は公共領域における娯楽活動として実在化し、それによって潤いある社会生活が生み出される。

(3) 郊外と公共領域

人の手によって新しく生み出される郊外は公共領域に乏しく、社会的豊かさが欠如した地域と考えられる。その理由として、郊外には神社や寺院などの歴史的公共領域がないことが挙げられる。また、郊外にはロードサイドビジネスを行うチェーン店ばかりが建ち並ぶことも理由の一つである。前述の通り、チェーン店は第3の場所ではなく、このことが郊外を公共領域に乏しい地域としてしまうのである。

(1)～(3)の論的背景の下、本研究では公共領域として

居酒屋に着目し、その中での娯楽活動を調査することによって郊外と都心部の魅力について検討を加える。

3. 仮説

(1) 自宅所在地に関する仮説

郊外化の進む現在でも、就業者の職場は都心部にあることが多い。よって、必然的に郊外に住む就業者は長い通勤時間が必要になり、娯楽活動に費やせる時間が少なくなってしまうと考えられる。(仮説1、2)

(2) 居酒屋の選択に関する仮説

もし郊外が魅力的な場所ではない、という命題が真であるならば、都心部は相対的に魅力的な場所であるはずである。したがって、自宅と通勤先を往復する際に都心部と何らかの接触を持つ就業者は、都心部で娯楽活動を行う可能性が高いと考えられる。逆に、郊外に住み郊外で働く就業者は、都心部の魅力に触れる機会がなく、郊外で娯楽活動を行うと考えられる。(仮説3、4)

(3) 娯楽活動地に関する仮説

もし郊外が魅力的な場所ではないという命題が真であるならば、郊外に存在する公共領域までもが魅力的ではないという可能性が考えられる。(仮説5)

表1 仮説

仮説1: 郊外に住むことが娯楽活動を終了する時刻を早める原因となる。
仮説2: 郊外に住むことが娯楽活動時間を短くする原因となる。
仮説3: 郊外に住んで都心部で働く人、都心部に住んで郊外で働く人、都心部に住んで都心部で働く人は、都心部で娯楽活動を行う。
仮説4: 郊外に住んで、郊外で働く人は、郊外で娯楽活動を行う。
仮説5: 郊外の娯楽施設では、都心部のそれよりも得られる満足度が低い。

4. 調査の概要

居酒屋の選定については、Oldenburg の第3の場所の条件に留意し、郊外（京都市西京区桂駅周辺）で2軒、都心部（京都市中京区四条河原町周辺）で2軒の計4軒の居酒屋を選定した。調査内容は自宅や通勤地の住所といった人々の移動に関するものだけでなく、来訪者の飲酒量や満足度、コミュニケーションの形態や同伴者の性質といった娯楽活動の中身についても調

査を行った。なぜなら、生活の質を検討しようとするとき、人々の移動の情報のみでは極めて限定的な結果しか得られず、活動そのものを観測する必要性があるからである。

5. 結果

表2 居酒屋から帰る時刻のモデル推定			
	パラメータ	標準化係数	t値
(定数)	1255.96		18.05
男性D	-79.03	-0.28	-2.40**
自宅都心部D	71.58	0.30	2.57**
通勤都心部D	10.48	0.052	0.39
居酒屋都心部D	4.42	0.022	0.16
通勤公共交通D	-77.49	-0.38	-2.62**
飲酒ペース	-6.77	-0.046	-0.40
満足度	30.65	0.29	2.46**
R ²			0.49
N			51

従属変数: 居酒屋を出る時刻(分) *p < .1, **p < .05, ***p < .01

表3 居酒屋滞在時間のモデル推定			
	パラメータ	標準化係数	t値
(定数)	2.77		2.62
男性D	0.23	0.058	0.44
自宅都心部D	0.94	0.26	1.96*
通勤都心部D	0.80	0.26	1.75*
居酒屋都心部D	-0.79	-0.26	-1.71*
通勤公共交通D	-0.15	-0.049	-0.30
飲酒ペース	-0.87	-0.40	-3.06***
満足度	0.16	0.11	0.81
R ²			0.30
N			53

従属変数: 居酒屋滞在時間(時間) *p < .1, **p < .05, ***p < .01

実地調査により得られたデータを用いて、娯楽活動終了時刻と娯楽活動時間についての線形回帰モデルを推定した。その結果を表2、表3に示す。この結果より、自宅が郊外の就業者は自宅が都心部の就業者よりも娯楽活動を終了する時刻が早く、また滞在時間も短いことが分かり、仮説1、2は支持された。この結果は、郊外に住むことが娯楽活動を行う上で不利であることを示唆している。

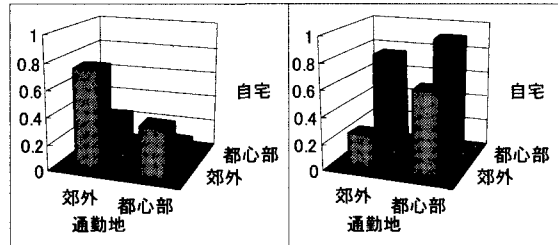


図1 郊外の居酒屋に行く就業者の分布(N=27)

次に同じく実地調査データをもとに、居住地、就業地、娯楽活動地の関係を示したものが図1、図2である。これより、自宅、通勤地共に郊外の人には郊外の居酒屋に、それ以外の人には都心部の居酒屋に行くことが

分かった。よって、仮説3、4は支持された。この結果は、都心部の居酒屋では、郊外の居酒屋よりも多様な人々が娯楽活動を行うことを示しており、多様性の欠落という点で郊外での娯楽活動が限られたものであることを示唆している。

表4 郊外・都心部の居酒屋における飲酒量及び満足度

	飲酒量(合)	満足度(5段階評価)
郊外	3.06(N=41)	4.35(N=39)
都心部	3.16(N=42)	4.39(N=41)
分散分析	F(1,81)=0.075	F(1,78)=0.036

しかし、郊外と都心部での飲酒量や満足度の分散分析結果(表4)は、郊外と都心部の居酒屋の間に飲酒量や満足度の違いを示さなかった。よって仮説5は支持されなかった。これより、そこで娯楽活動を遂行するものにとっては、郊外の居酒屋も都心部の居酒屋も同じように飲み、同じように満足のいく公共領域である、という可能性が伺える。

6. 結論と今後の課題

実地調査データの分析結果から、居住地、就業地、居酒屋活動場所の関係が明らかとなった。すなわち、自宅所在地、通勤地所在地が共に郊外の就業者は、郊外の居酒屋に行くが、その他の通勤形態の就業者は都心部の居酒屋に向かうという関係である。これより、都心部の居酒屋により多様な人々が集まり、そのため公共領域の質が高いという可能性があると言える。また、自宅が郊外であったり、通勤地が郊外であると、居酒屋活動終了時刻が早まり、居酒屋滞在時間が少なくなる傾向にあることも分かった。このことから、郊外居住は公共領域での娯楽活動の遂行に不利に働くと結論付けられる。しかしながら、飲酒量や満足度については郊外、都心部の居酒屋に違いが見受けられなかったことから、郊外にも魅力的な地域となりうる可能性が十分に残っていると言える。

今後の課題として、本研究では対象を就業者に限って分析を行ったが、主婦や学生についても同様の研究を行い、より一般性を高めることが必要である。また、郊外の就業者が遊びに出ないということは、家にいても十分に満足できるということも意味する。よって、家での活動、すなわち私的領域での活動についても検討することも必要である。

参考文献:1) Oldenburg, R: The Great Good Place—Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community, Marlowe & Company, New York, 1989.